

和歌山と移民

海外へ移住した 先人の歴史



和歌山が、全国有数の移住者を送り出した県であることを、知っていますか。

日本からの集団的移民は明治期に遡ります。

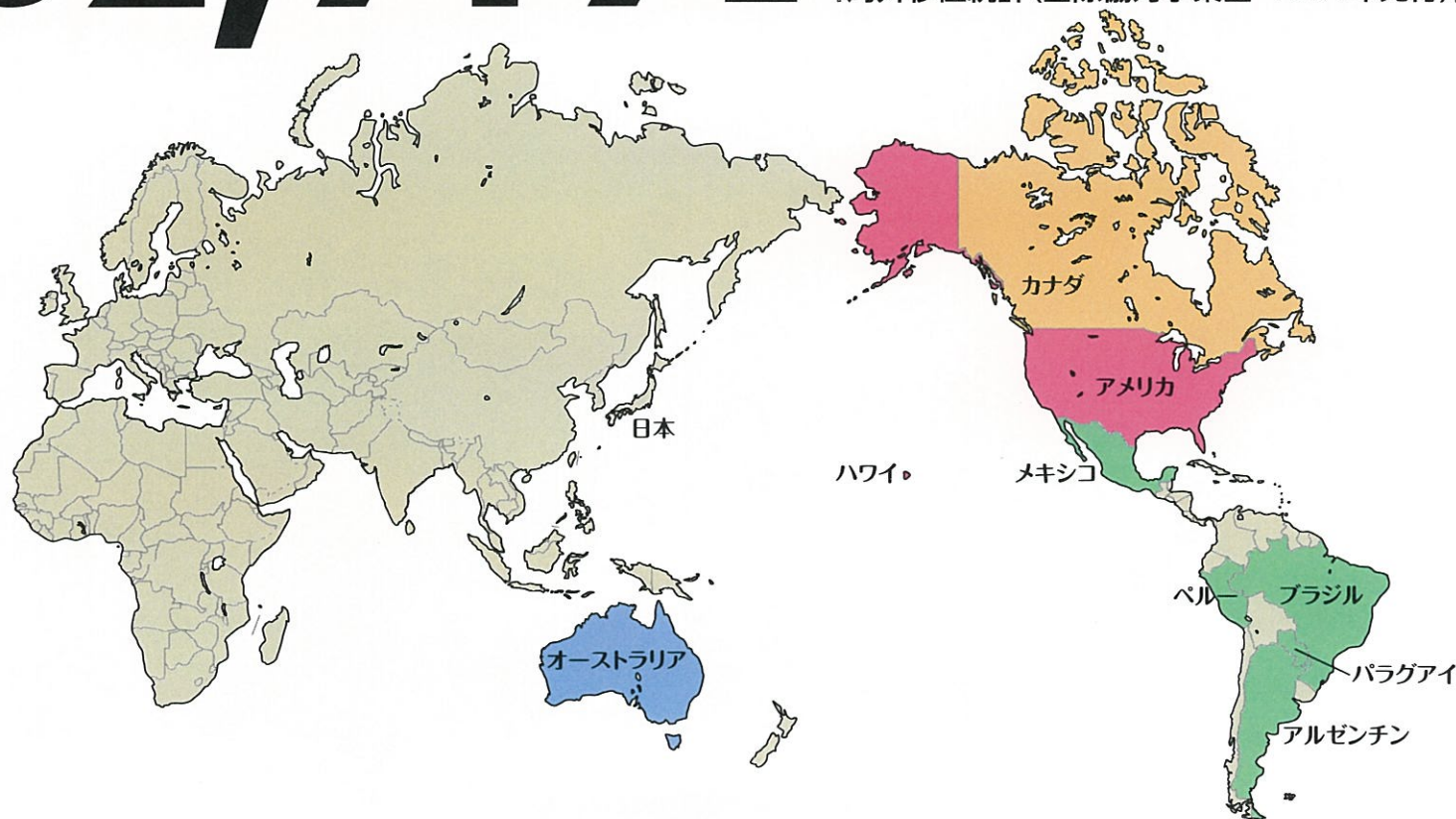
和歌山は、多くの県民がアメリカ、カナダ、オーストラリア、ブラジルなどへ仕事を求めて海を渡り、有数の移住者輩出県と称されています。

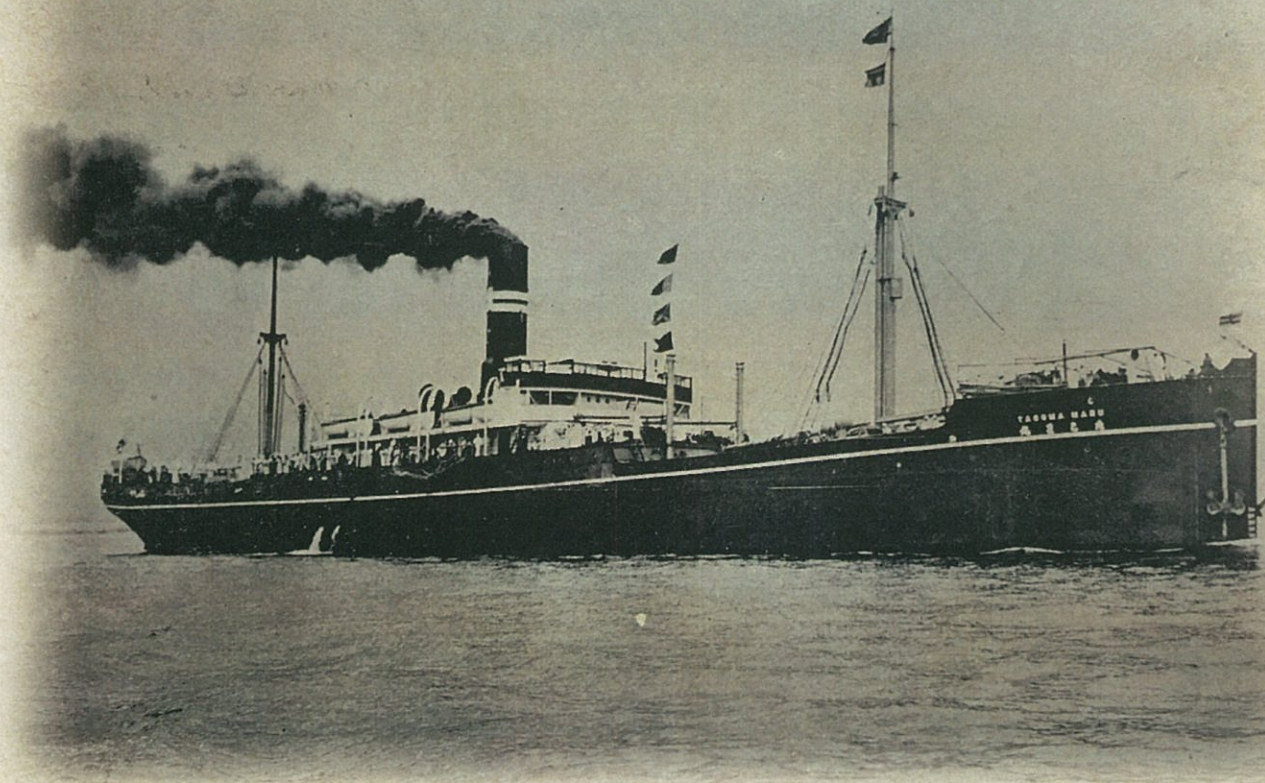
海外には、南北アメリカを中心に、いくつかの和歌山県人会があり、中には、100年を超える歴史をもつものもあります。

和歌山県から海外への移住者数

32,919名

『海外移住統計(国際協力事業団・1994年発行)』より





和歌山市民図書館蔵（海外興業株式会社『ブラジル移植民地写真帳』）

全国第6位の 移民県

—和歌山県からの移住者数—

和歌山県からの海外移住者数は、第二次世界大戦前がおよそ31,000人、戦後がおよそ2,000人で、広島、沖縄、熊本、山口、福岡について第6位です（『海外移住統計（国際協力事業団・1994年発行）』より）。日本最初の公式な移民は、1885年（明治18）の第一回ハワイ※官約移民で、953人の移住者のうち、22人が和歌山県人でした。

※官約移民

ハワイ王国からの依頼でハワイ政府と日本政府との間に契約が結ばれ、日本からハワイへ移民が送り出されました。この政府間契約によってハワイに渡った日本人移民を「官約移民」といいます。

故郷への送金

和歌山から世界各地へ移住した人々の多くは、移住先での永住ではなく、出稼ぎを目的としていました。稼いだお金の多くを、故郷へ送金していたのです。家族や親戚はもちろん、出身地の学校や寺、神社などへも送金されていて、故郷の暮らしを支えていました。

和歌山県出身の移住者からの送金額は、大正末期まで、全国一位であったといわれています。

（『和歌山県移民史』より）

※大正13年の送金額は、現在の貨幣価値に直すとおよそ20億円となります。
（戦前基準企業物価指数から計算）

年（西暦）	年（和暦）	金 額（円）
1924	大正 13 年	4,079,594
1925	大正 14 年	4,656,945
1926	昭和 1 年	3,923,832
1927	昭和 2 年	3,768,561
1928	昭和 3 年	5,928,306
1929	昭和 4 年	4,371,009
1930	昭和 5 年	3,000,682
1931	昭和 6 年	2,144,161
1932	昭和 7 年	2,385,440

世界各地への移民

中南米諸国

ブラジル

1908年、笠戸丸での渡航により日本からブラジルへの移民が始まる。多くの人々はコーヒー農園等での労働に従事した。戦後の食糧難・就職難や、1953年に発生した大水害を背景に和歌山県からも多くの人々が移住した。



広大な珈琲農園（ブラジル）和歌山市民図書館蔵
（海外興業株式会社『ブラジル移植民地写真帳』）

墨国和歌山県人会メンバー
（1936）
寺本就一氏蔵



メキシコ

元外務大臣榎本武揚が、1897年に自ら設立した移民会社によりメキシコへの移民が始まる。1935年にはシナロア州に移住した和歌山県人により県人会が設立された。

ペルー・アルゼンチン・パラグアイ

ペルーへの移民は1899年に始まり、初期にはサトウキビ農場での労働に従事した。アルゼンチンへは、日本から直接渡航した人々以外に、ブラジルなどからの転住者が多く渡った。パラグアイへの移民開始は1936年と新しく、和歌山県出身者が移住者の受け入れや新しい移住地の立ち上げに貢献した。



日本人初の移住地ラ・コルメナは
ブドウ酒で有名（パラグアイ）
JICA横浜海外移住資料館蔵

ハワイ・北米

ハワイ

1880年代、日本政府とハワイ王朝との間でサトウキビ畑での労働契約を交わした官約移民が始まる。その後は様々な職業に就き、和歌山県からの移住者は漁業などで活躍した。



サトウキビ農場での作業（ハワイ）
和歌山市民図書館蔵（篠遠和子・フランクリン王堂『図説ハワイ日本人史』）

アメリカ

1890年代以降、ハワイより賃金が高く、開拓途上で移民を歓迎したカリフォルニアなどへの移住者が増加し、農業、鉄道事業、鉱山事業、漁業、商工業などに従事。日本人が多く住んでいた地域には、コミュニティが形成された。



ターミナル島の缶詰工場の借家と
当時のツナ缶（アメリカ）
太地町歴史資料室蔵
（データ提供：和歌山大学・
紀州経済史文化史研究所）

カナダ

1880年代後半から、ブリティッシュコロンビア州でのサケ漁に従事する人々の移民が始まる。漁業従事者の大半が和歌山県三尾村（現在の日高郡美浜町三尾）出身者で占められ「加奈陀三尾村人会」が結成された。

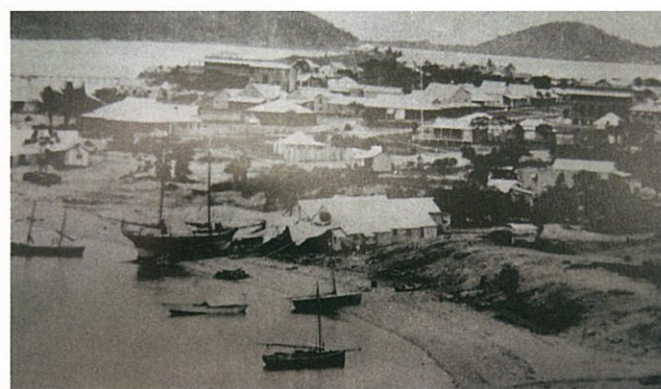


加奈陀（カナダ）三尾村人会
カナダ移民資料館蔵
（データ提供：和歌山大学・紀州経済史文化史研究所）

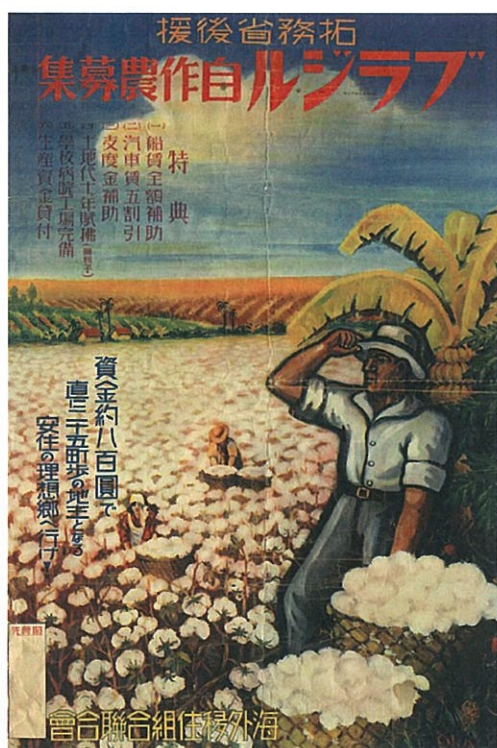
オーストラリア

オーストラリア

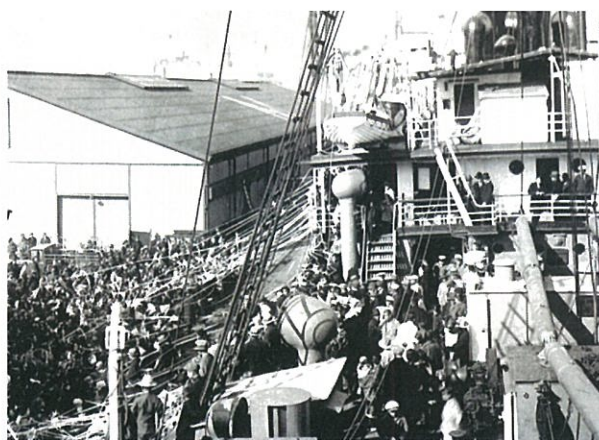
高級ボタンの材料とされた白蝶貝採取のため1880年代からオーストラリア北岸に位置するダーウィン、ブルーム、木曜島への移民が始まる。木曜島で採貝労働に従事する日本人は、全労働者の6割に達した。



木曜島の港風景（1910）（オーストラリア）
和歌山市民図書館蔵
（藤崎康夫編『日本人移民4 アジア・オセアニア』）



自作農募集ポスター 和歌山市民図書館蔵



出港のようす 和歌山市民図書館蔵
(竹下増次郎編『在伯同胞活動実況 大写真帖』)



サントス市街 和歌山市民図書館蔵
(海外興業株式会社『ブラジル移植民地写真帳』)

笠戸丸

1908年、第1回目のブラジル移民船として、781名の移住者を乗せ、神戸港からサントスまで航海しました。ブラジルの日系人にとって、笠戸丸は、移民史の始まりを象徴する存在です。



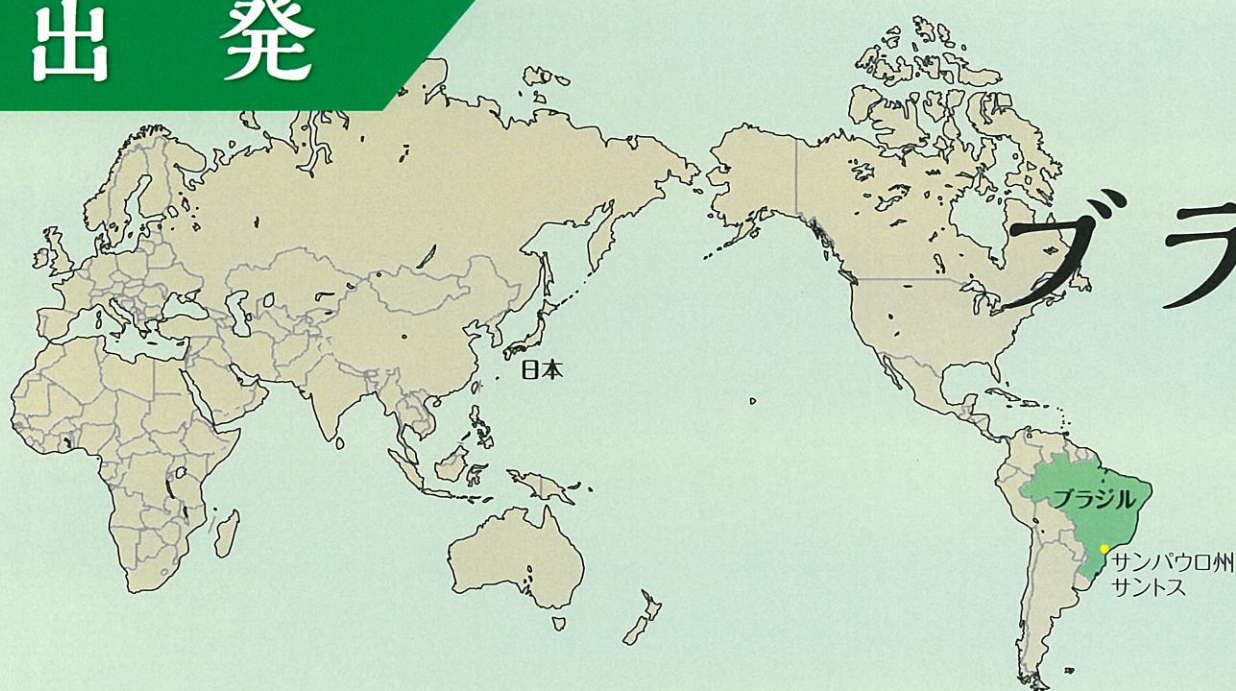
和歌山市民図書館蔵(内山勝男編『日本移民五十周年記念 かさと丸』)



図路航リ至ニ「ストンサ」リヨ戸神
スマン君到ニ港「ストンサ」ヲ日餘十六経ヲ港議阿南後嘉新ヲカ戸神迎千二萬一約ハ旅費西利伯ヲカ本日(1)

サントス航路 和歌山市民図書館蔵
(海外興業株式会社『ブラジル移植民地写真帳』)

ブラジル編 1 出 発



ブラジル移民の 始まり

日本人は、1908年に初めてブラジルへ移住しました。和歌山県人は、それから数年後の1910年代、大正初期頃に初めてブラジルへ渡ったとされています。船で神戸港を出発し、アフリカ大陸最南端の喜望峰を経由し、およそ2か月かけて、ブラジル・サンパウロ州の港町、サントスへ到着しました。そこから移民列車でサンパウロ市へ向かい、移民収容所で数日を過ごした後、内陸にある複数のコーヒー農園へと向かいました。

最初の数年は、コーヒーの不作もあり思うようには収入を得られませんでした。また、農園での待遇も悪く、用意された家が家具や床板もない掘立小屋であったり、まるで奴隷のように監視された状態での労働を強いられたりしたため、ストライキや脱走が多発しました。1908年、第1回の日本からの移住者781名のうち、1年後コーヒー農園に残ったのは、わずか191名であったと言われています。



国立移民収容所

1928年、政府の移民奨励策によって神戸に開設された施設。出港までに、講話や予防接種などを受けるなどして移住する準備をしました。

現在は、「海外移住と文化の交流センター」として、海外移住の歴史を伝える役割を担っています。

和歌山市民図書館蔵
(竹下増次郎編『在伯同胞活動実況 大写真帖』)



ブラジル編 2 開拓

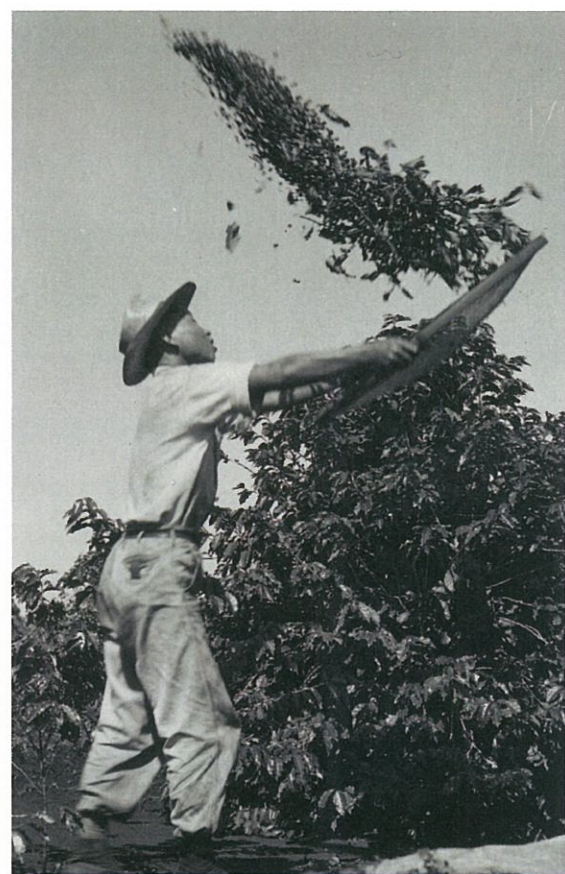
珈琲農園での作業 JICA横浜海外移住資料館蔵

幾多の困難を 助け合い乗り越える

それでも、数年経過すると、農作業にも慣れて収入が安定し、日本に残した家族にも送金できるようになってきました。すると、より大きな利益を得るために、土地を買い、あるいは借りて開拓し、自営農業をはじめの人が出てきました。

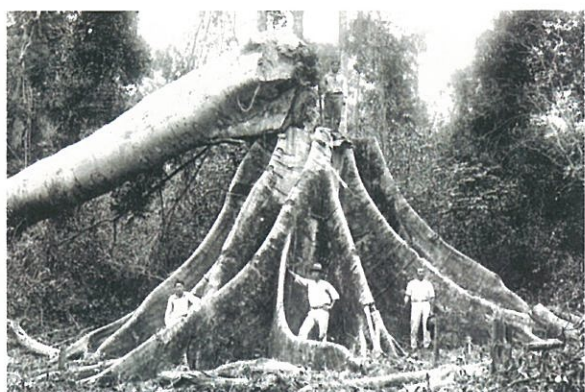
開拓には大変な苦勞が伴いました。自らの手で家を建て、井戸を掘り、原始林を切り開かなければなりませんでした。マラリアの蔓延、更にはイナゴの大群による食害、大干ばつなどの災害に見舞われた入植地もありました。

和歌山県人をはじめ、日本からの移住者は、互いに助け合いながらこれらの苦勞を乗り越えていきました。



珈琲農園での収穫の様子。ふるいにかけて土砂と実を選り分けます。

JICA横浜海外移住資料館蔵



樹高40メートルにも達する大木を切り倒す様子
和歌山市民図書館蔵(竹下増次郎編『在伯同胞活動実況 大写真帖』)



珈琲農園の様子
和歌山市民図書館蔵(竹下増次郎編『在伯同胞活動実況 大写真帖』)



珈琲農園の邦人用住宅
和歌山市民図書館蔵(竹下増次郎編『在伯同胞活動実況 大写真帖』)

移民の父

松原安太郎と「松原計画」



1892年に日高郡岩代村(現在のみなべ町)に生まれた松原安太郎は、1918年に長崎からブラジルへ渡ると、通訳業務などに従事しながら綿花栽培を始め、大農場主として成功をおさめます。

第二次世界大戦時、ブラジルは連合国に加わり日本と国交を断絶したため、日本からの移民は途絶えていました。

戦後、戦地から多くの人引き揚げてきたことなどによって日本は食糧難、就職難の危機に陥っていました。

この窮状をみた松原は、個人的に親しくしていた当時のヴァルガス・ブラジル大統領の助力もあり、日本人4千家族、2万人をブラジルのマット・グロッソ州(現在の南マット・グロッソ州)ドラードス植民地(松原移住地)へ移住させる「松原計画」を、ブラジル政府に認めさせます。

この計画は、ヴァルガス大統領の急死や移住者の脱走等、色々な問題がありうまくはいきませんでした。日本政府が後を継いで、戦後約6万人の日本人がブラジルへ移住しました。松原はその功績から「移民の父」と呼ばれています。

松原移住地

サンパウロ州の隣、マット・グロッソ州(現在の南マット・グロッソ州)ドラードス市近くに、松原安太郎が拓いた入植地。1953年に戦後初めての移住者が入植しました。入植当初、ドラードス市からの道は半分が原始林であり、移住者たちは、自らの手で道を切り拓かねばなりませんでした。大霜やマラリアなどの問題が発生し、脱走者も出るなど、開拓には大きな苦勞と犠牲が伴いました。



松原移住地の子供たち
迫間脩氏蔵

初代在伯(ブラジル)和歌山県人会の会長

竹中儀助と和歌山県人会

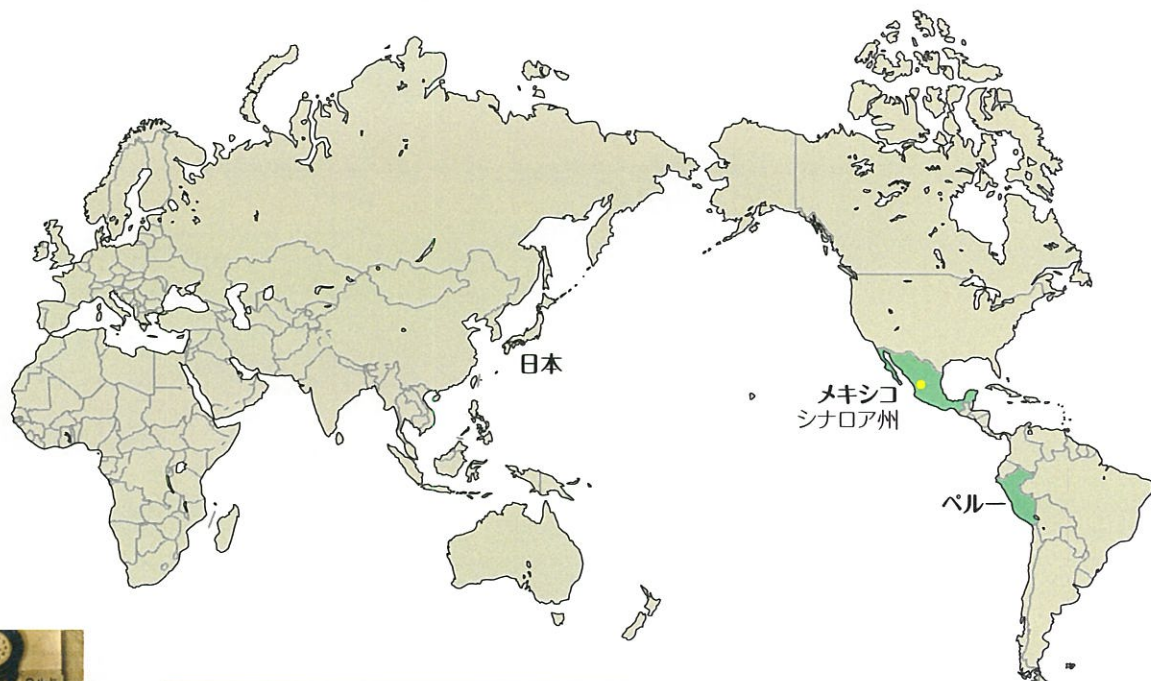
1889年に西牟婁郡東富田村(現在の白浜町)に生まれた竹中儀助は、1915年に満州に渡った後、1929年にブラジルへ移住しました。貿易会社で働きだすと、誠意と真面目さで信用を築き、農機具や肥料を扱う商社「竹中商店」を立ち上げて成功をおさめます。

1953年に和歌山県が死者・行方不明者1,000人を超える大水害を被った際、被害にあった人々を救済する目的で和歌山県人のブラジル受け入れを計画し、和歌山県と協力して「和歌山不動産株式会社」を設立します。彼を頼ってブラジルへ渡った人々を温かく迎え、親身になって就職の世話や経営指導を行いました。また、在伯(ブラジル)和歌山県人会の初代会長として、移住者のために尽力しました。



メキシコ編

中南米最初の移民



1935年頃の
日系人が経営する
宝飾品店
寺本就一氏蔵



1897年、元外務大臣の榎本武揚は、自ら設立した移民会社と契約した28名らとともにメキシコへ渡りました。これは、中南米への最初の日本人移民でした。榎本移民と呼ばれるこの試みは、資金不足などで移住者の逃亡が続出し、計画通りには進みませんでした。残った人々は同地で「日墨協働会社」を設立し、商店や農場など多岐にわたって事業を展開しました。和歌山県からも多くの人々が移住し、1935年には、シナロア州に移住した和歌山県人による「和歌山県人会シナロア」を設立しました。



1930年代の農作業の様子
寺本就一氏蔵

日系人が住んだ
典型的な家屋
寺本就一氏蔵



ペルー編

ブラジルより早く



耕地での労働の様子
「カルロス千代照平岡」
ペルー日本人移住資料館蔵
Museo de la Inmigración
Japonesa al Perú
"Carlos Chiyoteru Hiraoka"

ペルーへの移民は1899年に始まりました。ブラジルよりも9年早く、南米で労働契約を結んで渡った最初の移民と言われています。和歌山県人も1908年に初めてペルーへ渡っています。初期の移住者はサトウキビ農場や製糖工場と契約して働きましたが、契約が誠実に履行されないなどの問題があり、雇用主と移住者たちの間で騒動が発生しました。外務省の介入などで騒動が収まると待遇は改善され、日本全体で10年間の間に12回、計6,000名を超える人々がペルーへ渡りました。また、資金を貯めて、契約終了後に都市部へ移り、理髪店や雑貨店などを営む人も出てきました。



日系人の経営する雑貨店
「カルロス千代照平岡」
ペルー日本人移住史料館
Museo de la Inmigración
Japonesa al Perú
"Carlos Chiyoteru Hiraoka"

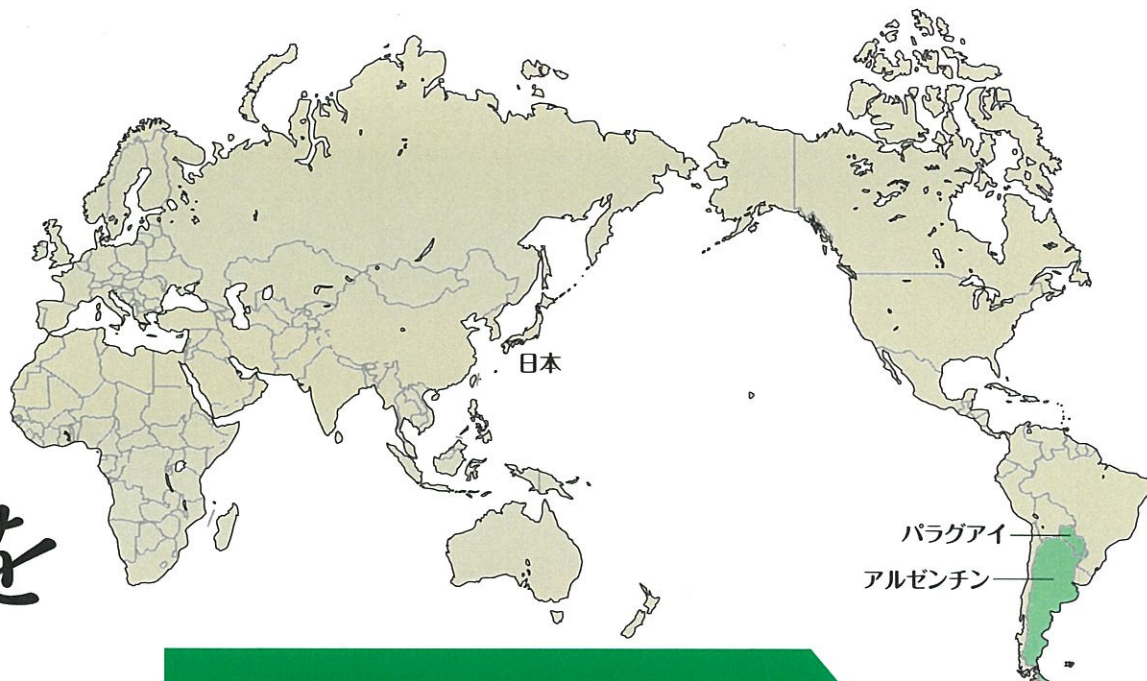
マンコカパック像の寄贈
「カルロス千代照平岡」
ペルー日本人移住史料館
Museo de la Inmigración
Japonesa al Perú
"Carlos Chiyoteru Hiraoka"



アルゼンチン編

近隣国から より良い環境を 求めて

日本人のアルゼンチン移民は、ブラジルのような集団での労働契約に基づくものではなく、近隣国から、より良い環境を求めて転住し、そこから親戚や知人を呼び寄せる形で始まりました。初期の移住者たちは、製鉄工場や製糖工場のほか、各家庭で料理人や掃除夫として働きました。1930年代になると、洗濯店、喫茶店、郊外での花卉栽培が増加しました。いずれも勤勉、清潔好き、手先が器用といった日本人の国民性に適した職業であり、国民性を活かして生活を築いていったことがうかがえます。



パラグアイ編

日系移住者の 発展に尽力

パラグアイへの最初の移民は1936年と比較的新しい時期です。初期の移住者の一人である和歌山県出身の石橋亘治は、1936年にパラグアイへ渡ると、農業に従事して成功します。その後、後進のパラグアイ移民を推し進め、1954年から3年間で計13家族を入植させました。また、日芭(芭:パラグアイの意)拓殖組合を組織してエンカルナシオン近くに新たにチャベス移住地を立ち上げるなど、パラグアイにおける日系移住者の発展に尽力しました。



移住地の駅に到着した人々。
JICA横浜海外移住資料館蔵

移住地での運動会の様子。
数少ない娯楽で、現地の人も参加しています。
JICA横浜海外移住資料館蔵



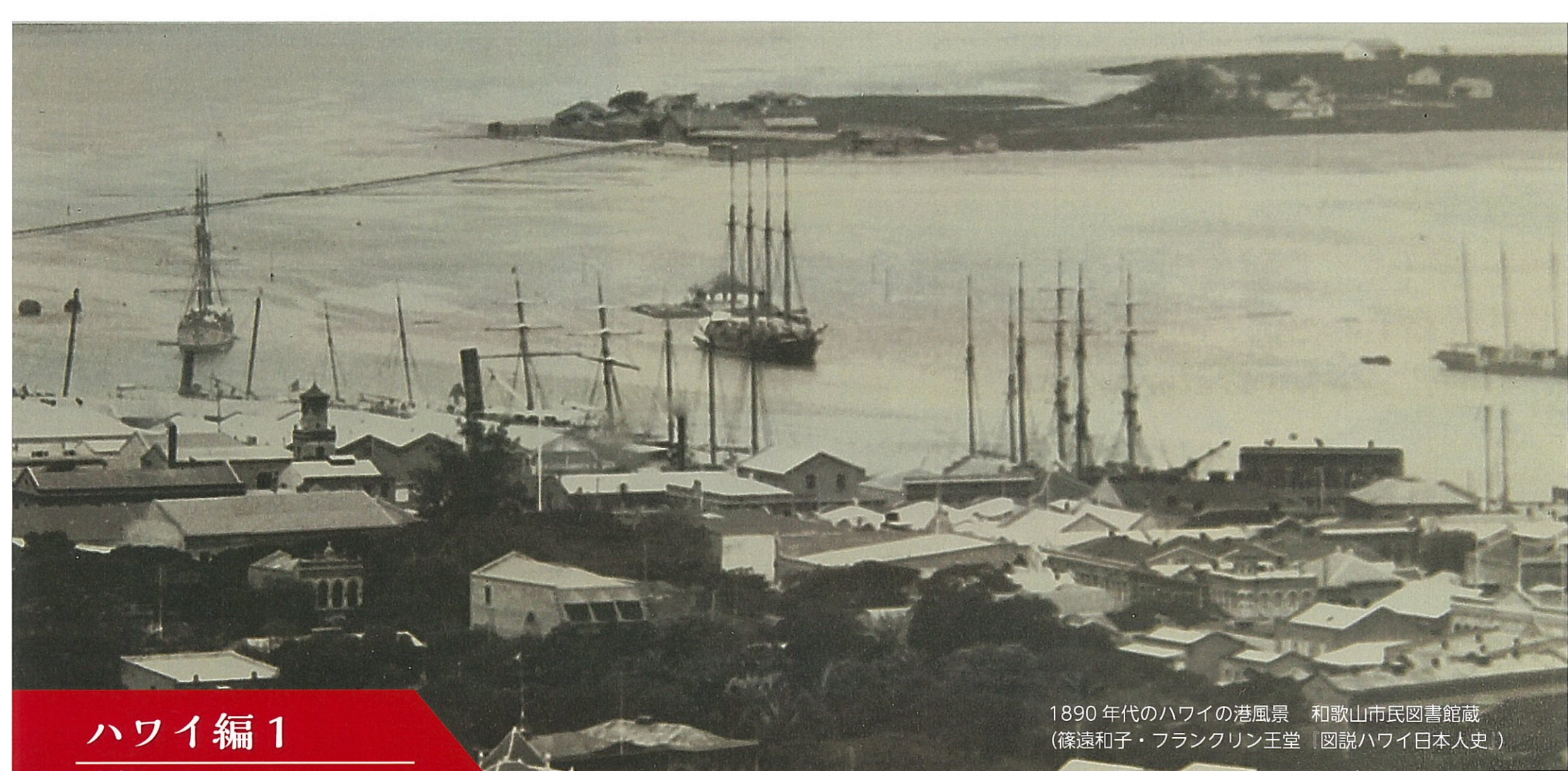
パラグアイ移住者の宿泊所
JICA横浜海外移住資料館蔵



日系人の菊農園の様子。
JICA横浜海外移住資料館蔵

移住地での日本人小学校の授業風景
JICA横浜海外移住資料館蔵





1890年代のハワイの港風景 和歌山市民図書館蔵
(篠遠和子・フランクリン王堂『図説ハワイ日本人史』)

ハワイ編1

集団移民



日本で最初の 公式移民

サトウキビ畑での労働力確保と人口増加のため日本からの移民受け入れを模索していたハワイ政府の意向を受けて、駐日ハワイ総領事であったヴァン・リードは江戸幕府と交渉し、明治維新直前の1868年、180名の旅券を江戸幕府から発行されます。

しかし、その直後に明治維新により政権が交代すると、明治政府は江戸幕府の旅券を無効として渡航許可を出しませんでした。渡航許可を求めるリードと政府の間で度々交渉がなされましたが相容れず、同じ年(明治元年)の4月28日、ヴァン・リードは、無許可のままハワイへ向けての渡航を強行しました。

これによってハワイへ渡った人々が「元年者(がんねんもの)」であり、彼らは、日本で最初の集団移民であるとされています。

元年者の渡航から17年後の1885年、日本政府がハワイ政府との間で交わした契約によって、953名の日本人が、日本で最初の公式な移民(官約移民)としてハワイへ渡りました。この中には、和歌山県人が22名含まれていました。



ヴァン・リード (左)



明治元年に渡航した移住者

写真は和歌山市民図書館蔵 (ハワイ日本人移民史刊行委員会編『ハワイ日本人移民史』)

ハワイ編 2

厳しい労働

サトウキビ畑での 厳しい労働



サトウキビ農場での作業
和歌山市民図書館蔵
(篠遠和子・フランクリン王堂『図説ハワイ日本人史』)

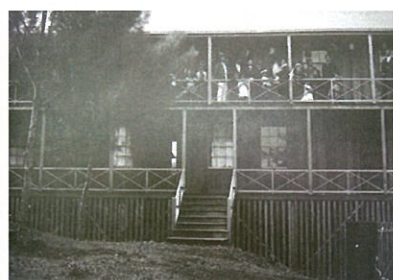
官約移民としてハワイへ渡った人々は当初、3年間の契約で、サトウキビ畑もしくは製糖工場での労働に従事しましたが、そこには多くの困難が待っていました。

契約で定められた時間外の労働に対しての賃金不払い、労働日数のごまかしなどが発生しました。また、食事の変化によって移住者の間で脚気(かけ)という病気が流行しました。この病気は元々ハワイには存在せず、現地の人々には理解できなかったため、

現場の労働者を監督する役人には仮病と誤解され、休むことを許されない場合もあったといわれています。

厳しい労働環境や契約の不履行などに反発したストライキも発生しました。両政府はこの状況を改善するために、日布(布:ハワイの意)移民条約を1886年に結び、その中に、移住者の人権や安全・健康を守るための条文を盛り込みました。

その後、官約移民は第26回まで続き、計29,000名を超える人々が移住しました。



日本人が居住した集落と宿舎
和歌山市民図書館蔵
(篠遠和子・フランクリン王堂『図説ハワイ日本人史』)



ストライキによって連行される日本人移住者
和歌山市民図書館蔵 (ハワイ日本人移民史刊行委員会編『ハワイ日本人移民史』)

ハワイ編 3

漁業で活躍



田並出身者の進水式 雑賀徹也氏蔵
(データ提供：JICA横浜海外移住資料館)

ハワイ漁業の 発展に貢献

サトウキビ畑や製糖工場での3年の労働期間が終了した後、そのまま帰国せずにハワイへとどまり、別の職業に就く人もいました。また、1898年にハワイがアメリカに併合されると、アメリカの法律によって仕事を自由に選べるようになり、ハワイに渡った人々は、多種多様な職業に就くようになります。

和歌山県からハワイに渡った人々は、1924年の時点では、およそ9割が漁業に従事していました。オアフ島では、全漁業者の約4割が和歌山県人で占められていました。

その中でも、串本、特に田並からの移住者が多く、ハワイの人々が元々行っていた疑似餌を使用する漁法を改良したケンケン漁で大きな成果をあげました。



雑賀徹也氏蔵
(データ提供：JICA横浜海外移住資料館)

ケンケン漁

疑似餌を引きながら船を走らせ、魚をおびき寄せて吊り上げる一本釣り漁法。「ケンケン」とは、疑似餌(ルアー)のことを指す。



中筋五郎吉

西牟婁郡田並村(現在の串本町田並)出身で、1899年に一家でハワイへ渡りました。初めてエンジンを搭載した漁船を開発するなど、漁具や漁法に改良を加え、ハワイにおける漁業の発展に大きく寄与しました。



本多和一郎邸 那賀移民史懇話会蔵
(データ提供: JICA横浜海外移住資料館)

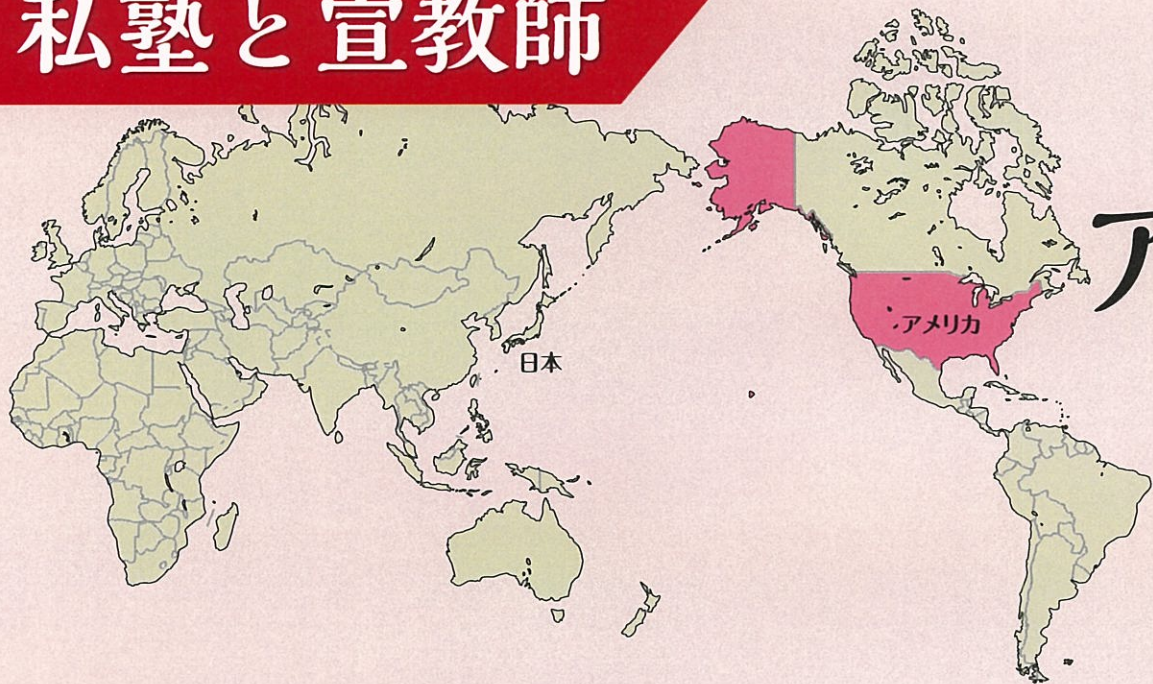


紀の川市の阿弥陀寺にある
本多和一郎の碑
JICA横浜海外移住資料館蔵



アメリカ編 1

私塾と宣教師



アメリカ移民の 始まり



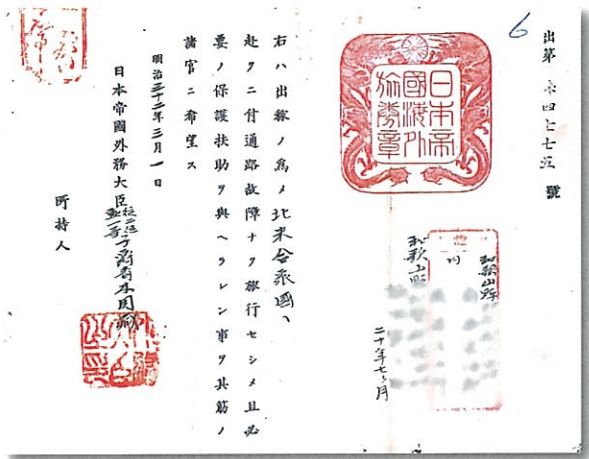
J.B. ハール



本多和一郎
JICA横浜海外移住資料館蔵

那賀地方(現在の紀の川市)には、幕末維新から明治時代にかけての動乱期、多くの私塾が設立されました。慶應義塾で学んだ本多和一郎は、福沢諭吉の影響を受けて私塾「共修学舎」を開設。欧米の進んだ技術や学問を学ぶことを、那賀地方の人々に勧めました。その他多くの私塾が紀北地方に開設されたことなどから、人々の欧米への関心が高まり、南加和歌山県人会初代会長となる湯浅銀之助など、多くの人々が移住しました。

アメリカから日本へ渡った宣教師たちも、人々の移民に貢献しました。本多和一郎をはじめ多くの人々が洗礼を受けてキリスト教徒となり、キリスト教の布教とともに、英語学習などに力を入れました。和歌山県ではハール兄弟が有名で、1886年、和歌山市内に英語学校を開設し、人気を集めました。



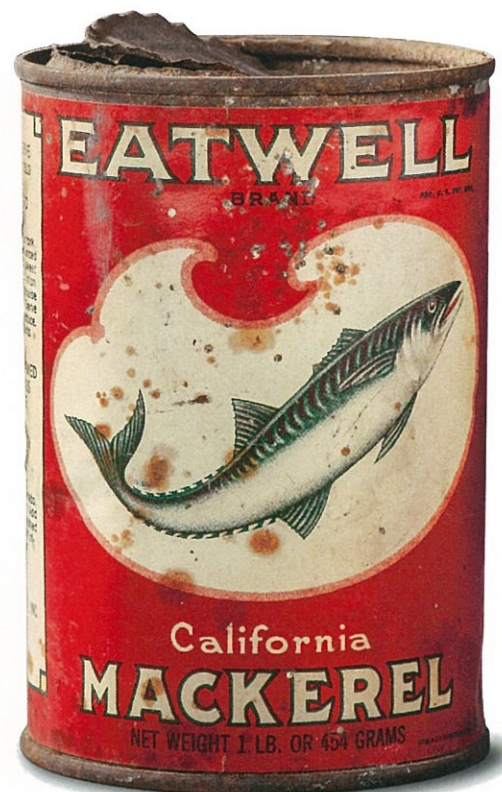
明治32年に発行されたアメリカ行きのパスポート
那賀移民史懇話会蔵

アメリカで 日本人コミュニティ を結成

19世紀末から20世紀初頭にかけて、開拓の途上にあって労働力が不足し、移住者を歓迎していたカリフォルニアなどへ、和歌山県から、特に紀南地方などから多くの人々が渡りました。1900年代初頭には、ロサンゼルス港にあるターミナルアイランドと呼ばれる島に和歌山県人が渡りました。これが、この地に最初に入った日本人でした。

以後、ターミナルアイランドには次々と日本人が集まり、男性は漁業に従事し、女性は缶詰工場で働きました。1930年ごろには3,000人もの日系人が暮し、コミュニティを形成していました。その大半は和歌山県人で、日本生まれの一世とアメリカ生まれの二世で構成されていました。

出身の村ごとに郷村会が作られ、その中で最大であったのは在米太地人会でした。そのほか、和深、田並、田原(いずれも現在の串本町)、宇久井(現在の那智勝浦町)出身者たちによる村人会が結成されました。



ターミナルアイランドで製造されたサバの缶詰
太地町歴史史料室蔵
(データ提供：和歌山大学・紀州経済史文化史研究所)



缶詰工場での労働の様子 太地町歴史史料室蔵
(データ提供：和歌山大学・紀州経済史文化史研究所)



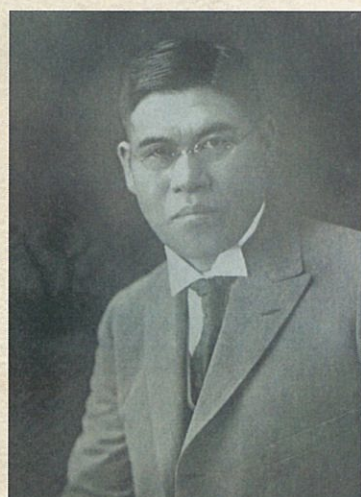
ターミナル島の漁師たち 太地町歴史史料室蔵
(データ提供：和歌山大学・紀州経済史文化史研究所)



在米太地人会のピクニック 太地町歴史史料室蔵 (データ提供：和歌山大学・紀州経済史文化史研究所)

南加和歌山県人会の初代会長

湯浅銀之助



那賀郡荒見村(現在の紀の川市)出身で、1890年にみかん輸出のため渡米し、サクラメントで果樹園の仕事に従事しました。1897年に日本語雑誌「新日本」を、1902年には日本語新聞

「羅府日本」を創刊しました。

南カリフォルニア在留日系人の先覚者で、南加和歌山県人会の初代会長を務めました。



一時帰国した湯浅(中段右)と湯浅の手紙
那賀移民史懇話会蔵(データ提供: JICA横浜海外移住資料館)

レタスなどの栽培で成功

南弥右衛門



南芳夫氏蔵
(データ提供: JICA横浜海外移住資料館)

1905年にハワイを経てサンフランシスコへ渡り、レタスなどの栽培で成功をおさめます。シカゴや遠くニューヨークなどへも出荷し、「レタス王」と呼ばれました。故郷の発展のために江住村(現在のすさみ町)の小学校等に多くの寄付をし、江住中学校体育館も弥右衛門の寄付により建設されました。



農作物を貨物列車で輸送する様子
南芳夫氏蔵(データ提供: JICA横浜海外移住資料館)



広大な南農園 南芳夫氏蔵(データ提供: JICA横浜海外移住資料館)

東京にオリンピックを招致した日系人

和田フレッド勇

ワシントン州で生まれた日系二世で、第二次世界大戦後、スーパーマーケットの経営で成功をおさめます。1958年、日本政府から依頼されて東京オリンピック招致委員会の委員に就任すると、中南米諸国のIOC委員を活発に訪問して協力要請を行い、東京でのオリンピック開催に大きく貢献しました。



日刊サン蔵(データ提供: JICA横浜海外移住資料館)



東京五輪の開会式に出席するため
に来日した和田夫妻

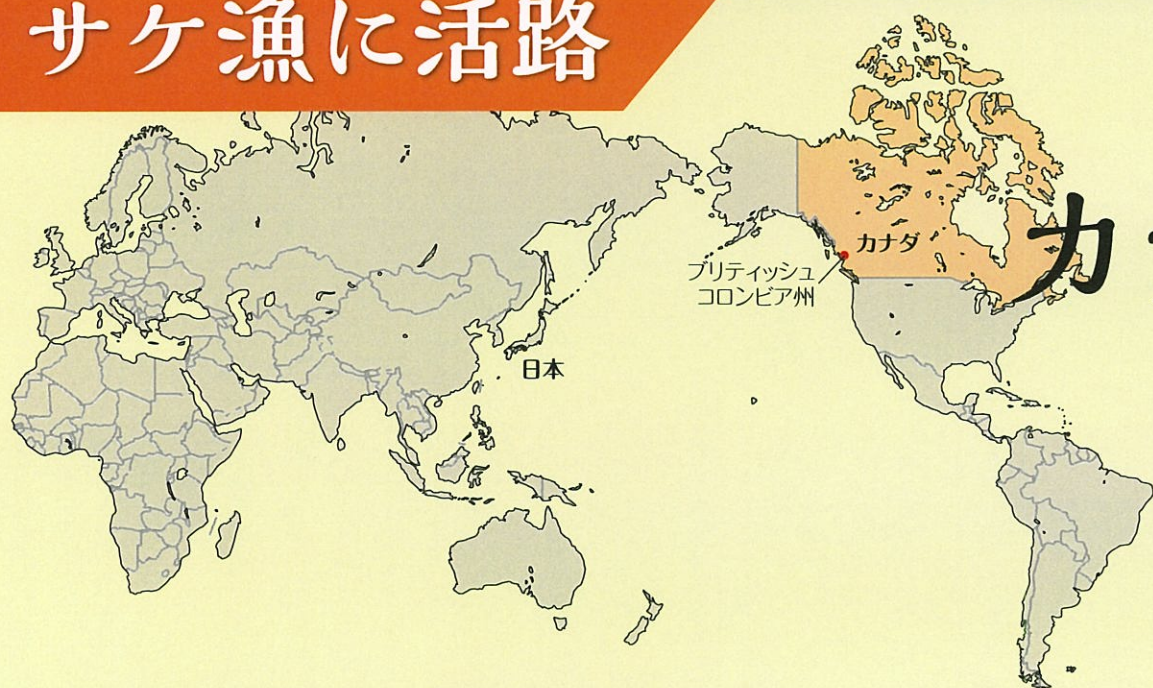


選手を激励する和田

ロッキー山脈に発し、ブリティッシュコロンビア州中南部を流れるフレーザー河

カナダ編 1

サケ漁に活路



カナダ移民の父 工野儀兵衛



大量に水揚げされた魚 1908年(明治41)
カナダ移民資料館蔵
(データ提供:和歌山大学・紀州経済史文化史研究所)



工野儀兵衛

三尾村(現在の美浜町三尾)出身の工野儀兵衛は、バンクーバーの製材所で働いていた従兄弟の紹介で、1888年に横浜港からカナダのブリティッシュコロンビア州へ渡りました。

そこでサケ漁業の将来性を見出し、三尾村に住む弟や親戚・友人を呼び寄せました。多くの若者が工野の呼び寄せに応じてサケ漁の中心地スティーブストンへ渡りました。彼らの間では、和歌山弁の「連れもていこら(一緒に行こう)」という言葉が流行したとされています。

工野儀兵衛は、人々のカナダ移民に尽力するとともに小学校の建築費用を送金するなど、三尾村の繁栄とカナダのサケ漁業発展に貢献し、「カナダ移民の父」と呼ばれています。



サケを乾燥させる作業
カナダ移民資料館蔵

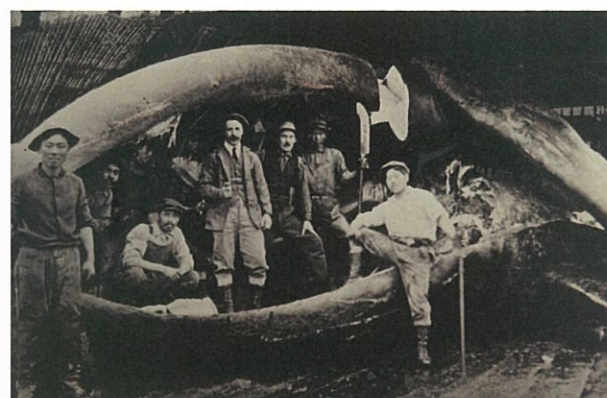


移住者が使用した漁船
カナダ移民資料館蔵
(データ提供:和歌山大学・紀州経済史文化史研究所)

三尾のアメリカ村と三尾村人会



大木の伐採作業 カナダ移民資料館蔵



クジラの解体作業 カナダ移民資料館蔵

加奈陀(カナダ)三尾村人会
カナダ移民資料館蔵
(データ提供:和歌山大学・紀州経済史文化史研究所)

故郷三尾村を支えた移住者

工野儀兵衛に呼び寄せられてスティーブストンに渡った人々は次第に増えていき、1900年におよそ150名の会員で「加奈陀三尾村人会」が結成されました。日本人は、サケ漁、クジラ漁といった漁業や林業などに従事しました。その中で和歌山県人の多くは漁師や缶詰工場で働く人が多く、当時、スティーブストンのあったブリティッシュコロンビア州で活動していた漁業者の6割から7割は和歌山県人が占め、三尾出身者がその中心を担っていました。このようにして、スティーブストンに「カナダの三尾村」が出現したのです。

一方、三尾村では、カナダからの送金などによって困窮を脱して裕福な村となりました。カナダから帰国した人々は、英語交じりの言葉で話し、西洋様式の生活を持ち帰り、西洋様式の住居を構えたため、通称「アメリカ村」と呼ばれるようになったのです。



子供を背負って缶詰工場で労働する
カナダ移民資料館蔵



移住地に作られた日本人学校
カナダ移民資料館蔵



三尾地区には、今も当時の建築様式で立てられた住宅が残る

日系人の誇りとなった 野球チーム

第二次世界大戦前、バンクーバーのパウエル街という日本人街に、日系人の野球チーム「朝日軍」がありました。朝日軍は、1914年に設立されてから1941年の日米開戦でなくなるまで、所属するリーグで何度も優勝する強豪で、当時白人からの差別や排日運動に苦しんでいた日系人たちの間で、大変な人気がありました。

現在では日本人街はなくなっていますが、毎年8月にはパウエル祭という日系人のイベントが行われ、カナダ各地から日系人が訪れます。



戦前のパウエル街の様子
カナダ移民資料館蔵（データ提供：JICA横浜海外移住資料館）



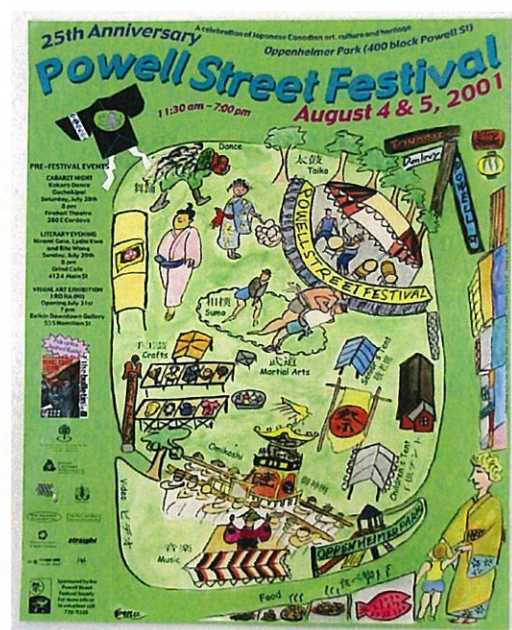
バンクーバー朝日軍 1926年
Special Collection Division UBC Library蔵（データ提供：JICA横浜海外移住資料館）



朝日軍のプレート
JICA横浜海外移住資料館蔵



パウエルストリートのタイル画
JICA横浜海外移住資料館蔵



パウエル祭のポスター
JICA横浜海外移住資料館蔵

木曜島の港風景 <1910> (オーストラリア)
和歌山市民図書館蔵 (藤崎康夫編『日本人移民4 アジア・オセアニア』)

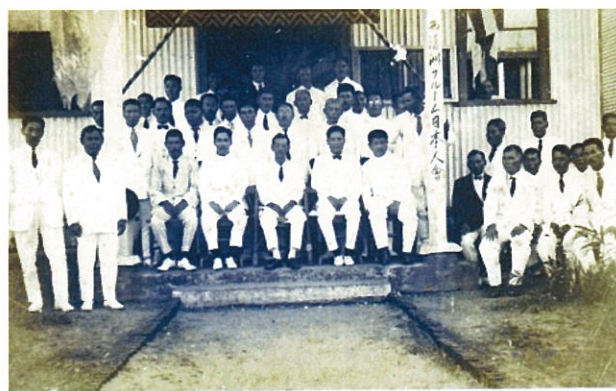
オーストラリア編1 真珠貝の採取



優秀なダイバー として活躍した 和歌山人



高級ボタンの材料となった白蝶貝
太地町歴史史料室蔵
(データ提供：和歌山大学・紀州経済史文化史研究所)



西豪州ブルーム日本人会 1926年(昭和元年)
岡田通子氏蔵 (データ提供：和歌山大学・紀州経済史文化史研究所)

オーストラリアへも、白蝶貝(真珠貝)採取のため大勢の和歌山人が渡っています。1880年代に始まり、オーストラリア北岸のブルームや木曜島、ダーウィン等に渡りました。

1897年頃、木曜島で白蝶貝採取に関わっていた日本人は全従事者の6割に達し、そのうち8割は和歌山人であったといわれています。紀南地方の出身者が多く、優秀なダイバーとして活躍しました。

木曜島の日本人ダイバー
ブルーム、ダーウィンなどでも活躍
和歌山市民図書館蔵
(藤崎康夫編『日本人移民4 アジア・オセアニア』)



危険なダイバーの仕事



浮上したダイバー
太地町歴史史料室蔵
(データ提供:和歌山大学・
紀州経済史文化史研究所)

命がけの白蝶貝採取

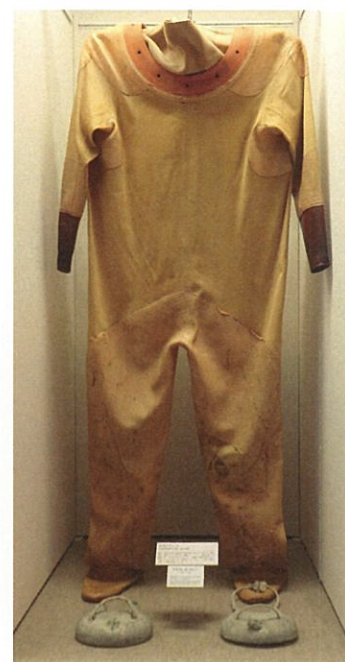
ダイバーの仕事には、潜水病や鯨など、様々な危険が伴い、多くの日本人ダイバーが命を落としました。初期のダイビングスーツは80~90kgもの重量があり大変動きにくいものでした。また、船上から送風パイプを通じてダイバーに空気を送っていたため、窒息による事故も絶えなかったといわれています。

海に潜るダイバーは、船上にいる作業員と、あらかじめ決められた命綱の引き方や回数によってコミュニケーションをとっていました。

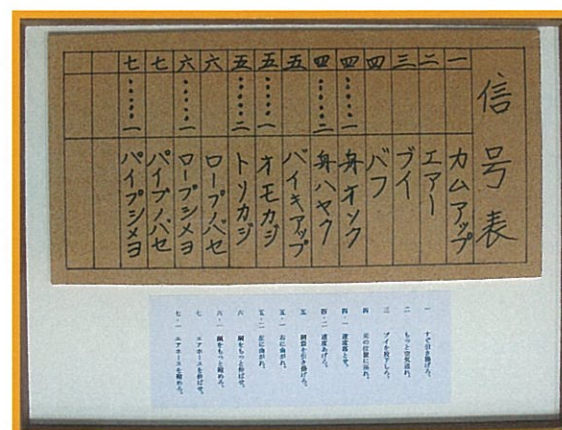
ブルームにある日本人墓地には700基以上の墓石があり、また、串本町やすさみ町には、オーストラリアでの白蝶貝採取に携わりなくなった人々の慰霊碑、記念碑が建立されています。



初期のダイバーが使用していたヘルメット
空気を送る送風パイプが付けられている。
串本町教育委員会蔵(データ提供: JICA 横浜海外移住資料館)



ダイビングスーツ



信号表:命綱の引き方や回数によって意味が決められており、移動や空気量の調整などを指示していた。

太地町歴史史料室蔵
(データ提供: JICA 横浜海外移住資料館)

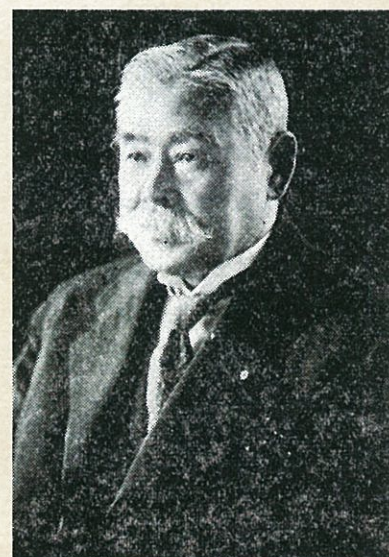


信号表を付けた船
デール・チャップマン氏蔵
(データ提供: JICA 横浜海外移住資料館)

木曜島のキング

佐藤虎次郎

1893年、外務大臣陸奥宗光の命を受けて移民の実態を調査するためオーストラリアに渡航します。帰国後、養子として移り住んでいた東牟婁郡高池村(現在の古座川町)の青年を連れて木曜島へ再度渡り、白蝶貝採取事業、造船事業、飲食店経営など行いました。白蝶貝採取事業では、紀南地方の若者2,000人以上をダイバーとして率い、「木曜島のキング」と呼ばれました。



日本人会のリーダー

村上安吉

1897年、16歳でオーストラリアに渡ると、写真師や商人として活躍し、現地日本人会のリーダーを務めました。潜水病で亡くなるダイバーを救うため、旧式の潜水服を改良し、より簡易で安全な呼吸装置を発明した他、白蝶貝の養殖研究にも取り組みました。



串本町教育委員会蔵
(データ提供: JICA横浜海外移住資料館)



串本町潮岬にある「潮風の休憩所」では、オーストラリア北部の木曜島での白蝶貝採取用の潜水ヘルメットや、白蝶貝でできた装飾品などが展示されている。



第二次世界大戦と日系人

日系人の強制収容

1941年12月に日米が開戦すると、アメリカ政府は、翌年2月までに2,000人を超える日本国籍保持者を強制収容しました。さらに同年の8月までに、強制収容は、アメリカの市民権を持つ人も含め、10万人以上の日系人に及びました。

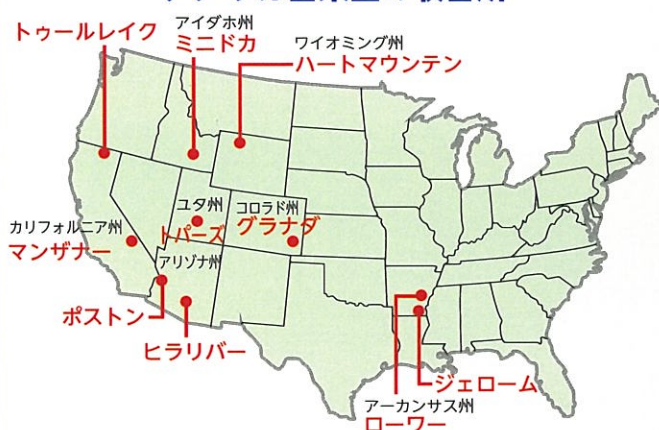
ターミナルアイランドの漁師たちは、船に取り付けられた通信機器によるスパイを疑われ、真珠湾攻撃の直後に連行されました。
 巽幸雄氏蔵(データ提供: JICA横浜海外移住資料館)



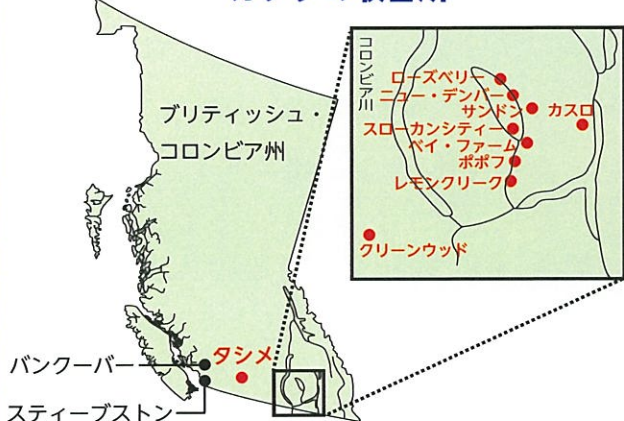
カナダでは、1942年に西海岸に位置するブリティッシュコロンビア州に住んでいた日系人が内陸部への強制移動を命じられ、これを拒否すると捕虜収容所に強制収容されました。オーストラリアでも、1,100人以上の日系人が3か所の収容所へ強制収容され、終戦後は日本へ強制送還されました。

アルゼンチンとチリを除く多くの中南米諸国でも、日米開戦後の1942年に日本との国交を断絶し、大都市への強制移動などが行われました。

アメリカ合衆国の収容所



カナダの収容所



オーストラリアの収容所



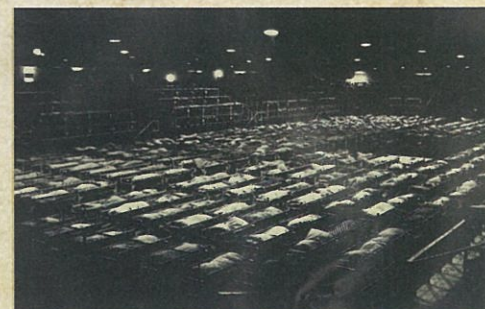
全ての日系人への強制移動を命じる通告文を張り出す警察官
 カナダ移民資料館蔵



収容所では過酷な労働を強いられました。カナダ移民資料館蔵



収容所の様子 カナダ移民資料館蔵



所狭しと並べられた収容者のためのベッド
 カナダ移民資料館蔵



カナダのタシメ収容所。極寒の地でありながらストーブが数家族に1つしかないなど劣悪な環境でした。
 カナダ移民資料館蔵

収容所での生活を描いた ヘンリー杉本

和歌山市出身。1919年に両親に呼び寄せられて渡米し、画家として活躍しました。強制収容所に持ち込んだ筆と絵具でシーツをキャンバス代わりに収容所での生活を描いた作品は、その様子を今日に伝える貴重な資料となっています。



昼食前の列 昼食時、それを知らせるラッパの号令とともに食堂の入り口に並ぶ日系人たち



ジェローム収容所へ到着

収容所へ到着したが完成しておらず、
倉庫で一夜を過ごす家族



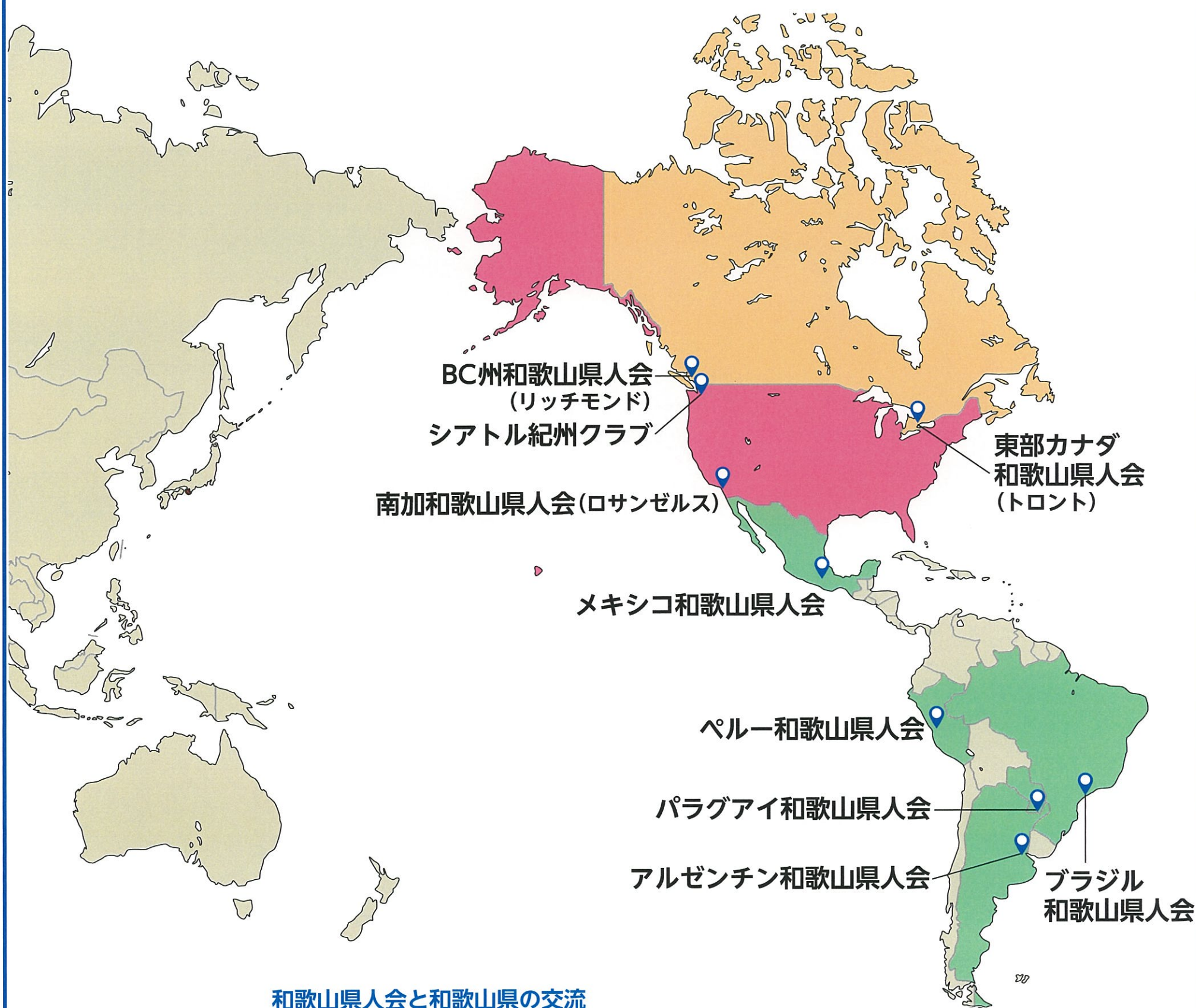
重荷を背負う



最後の決断

世界各地の和歌山県人会

世界各地へ移住した和歌山県出身の人々は、親睦や相互扶助などを目的に、和歌山県人会を組織しました。故郷から遠く離れた異国の地において、こうした県人会の存在は移住者たちの心のよりどころとなりました。現在、様々な活動を通して文化や伝統を次世代へ継承しています。



和歌山県人会と和歌山県の交流

和歌山県では、県人会の活動を称えるとともに今後の関係強化を図るため、各県人会の創立周年記念式典等に参加しています。

また、南加和歌山県人会および中南米諸国の和歌山県人会の子弟を受け入れ、ホームステイや県内学生と交流を図るなどの事業を実施しています。これは、子弟が自らのルーツである和歌山県との交流やその理解を深め、将来の県人会の発展につなげることを目的としています。

世界各地の
和歌山県人会

県人会の活動

各地の県人会は、活動の主体を一世から二世、三世の若い世代へ移しながら、様々な形で活動しています。



アルゼンチン

在アルゼンチン和歌山県人会のピクニックの様子。パリージャと呼ばれる焼肉が付き物

在アルゼンチン和歌山県人会提供



アメリカ
ロサンゼルス

恒例のピクニックでの
集合写真

南加和歌山県人会提供



カナダ
トロント

県人会創立40周年式典で、会員
によって披露されたぶんだら節

東部カナダ和歌山県人会提供



ブラジル

ブラジルで毎年開催される「日本祭り」で関西風お好み焼きを販売しています。
売り上げは毎年右肩上がりで大人気となっています。

ブラジル和歌山県人会提供



ペルー



父の日・母の日で集まった
会員たち

在ペルー和歌山県人会提供

世界各地の
和歌山県人会

周年式典への出席

和歌山県は、各地の県人会が開催する創立記念式典に、県からの訪問団がお祝いのために参加して、移住者やその子弟たちと交流しています。



2014 ブラジル

2014年には、在ブラジル和歌山県人会(当時は在伯和歌山県人会連合会)の創立60周年記念式典に出席し、先人の功績・遺徳を顕彰しました。



2015 アメリカ・メキシコ・カナダ

2015年には、在メキシコ和歌山県人会の創立30周年、シアトル紀州クラブの創立110周年、B.C.州和歌山県人会(カナダ リッチモンド市)の創立50周年記念式典に出席し、県人会の皆様を激励しました。



2016 カナダ・ペルー・アルゼンチン

2016年には、東部カナダ和歌山県人会(トロント)の創立40周年、在ペルー和歌山県人会の創立25周年、在アルゼンチン和歌山県人会の創立50周年式典に出席し、交流を深めました。



世界各地の 和歌山県人会

子弟受け入れ事業

和歌山県は、南加和歌山県人会(南カリフォルニア)や中南米諸国の和歌山県人会子弟を、数週間和歌山県へ受け入れる事業を実施しています。訪問した子弟たちは、県内の高校生、大学生との交流や日本文化体験、県民との交流イベントなど、様々な形で日本・和歌山を体験します。

県人会の若い世代の方々に自らのルーツである和歌山県に触れてもらい、将来の県人会活動の維持、発展に貢献できる人材に育ててもらうことを目的としています。



和歌山県国際交流センターで開催された「グローバルセミナー」で、自分の家族やアメリカでの生活についてプレゼンテーションを行い、県民の皆様と交流しました。



グローバルセミナー参加者と
記念写真



和歌山市内の和菓子店で、
和菓子作り体験。



円月島前で記念写真



着物を体験



手まりづくり体験



屏風づくり体験